

生きものの元気米

- 田んぼの生きもの -



大 切 な つ な が り



田んぼの生きものを守るのはなぜ？

田んぼは生きもの宝庫

日本の田んぼには6,000種を超える生きものがすんでいると言われています。そうした多様な生きものがすめる理由の1つは、米づくりすることで、田んぼが耕されたり、水が入ったり抜かれたりするためです。適度にかく乱が起こることで、特定の強い種のみが田んぼを独占するのではなく、競争では負けてしまうけど子孫をたくさん産むことができる種などが生き残れます。また畔があることで陸と水の両方を必要とする種もすむことができます。

残された貴重なすみか

田んぼがあった場所の多くは、もともと湿地だったところですよ。氾濫原とも言い、川が今のように整備されていなかった頃、氾濫の後にできる環境です。今は、そうした環境がなくなってきており、もともと湿地にすんでいた生きものの多くが田んぼをすみかとするようになりました。生きものにとって、田んぼは人が開発でなくしてしまった湿地の代替地となっています。

身近な生きものが多い

田んぼには、アマガエルやトノサマガエル、アキアカネなど人々の身近にいる生きものが多くすんでいます。しかし、昔から日本人の原風景をつくってきた生きものが急速に減ってきています。田んぼ自体の減少とともに、ほ場整備がされたこと、稲作の方法が変わったことや新しい農薬が開発されたことが関係しているようです。

生きものがある田んぼは、人にも良い

田んぼに多様な生きものがあるということは、農薬をあまり使っていなかったり、有機肥料で育てていたりなど、安全安心な米づくりをしていることを物語っています。田んぼから出た水や撒かれた農薬は人の生活圏にも入ってきますので、生きものがある田んぼを増やすことは、安心して住める地域をつくることにつながります。



トノサマガエル

トンボの幼虫

イトミミズのながま

ユスリカのながま

ハッタミミズ

『生きものの元気米』のとりくみ



2014年～



生きものの元気米認証マーク

← 1袋ごとのロット番号

KLi 123 - 21 - 000

田んぼコード 生産年 袋ごとの固有番号

生きものの元気米は、①農薬の空中散布をしない+浸透性殺虫剤を使わない、②畦の除草剤を使わない、この2つの条件で石川県河北潟湖周辺の農家とNPO(河北潟湖沼研究所)が契約栽培し、NPOが田んぼの生きもの調査をして、田んぼ一枚ごとに認証しているお米です。大規模化、省力化をすすめる農業によって失われる田んぼの価値を見直し、みんなが元気になる農業を目指して、仕組みを考えました。

まもりたい小規模農業

高齢化、省力化、環境劣化

→ 連携、工夫戦略、持続可能

元気な田んぼを増やすため

生きものの元気米は、他の田んぼのお米がまざらないように、NPOで田んぼ一枚ごとに袋詰めし販売しています。食べる方が、お米がつくれる田んぼの環境や生きものに興味をもって、継続的に田んぼのファンになっていただけるよう取り組んでいます。食べる方が増えることで、元気な田んぼが増えるしくみです。



制作/NPO法人河北潟湖沼研究所

TEL 076-288-5803 Fax 076-255-6941

URL <http://kahokugata.sakura.ne.jp/>

Mail info@kahokugata.sakura.ne.jp